

## チェコが生んだ二大傑作、一期一会の夜

～ミュシャ展『スラヴ叙事詩』、プラハ交響楽団《わが祖国》に寄せて～

加藤浩子 (音楽評論家) *Hiroko Kato*

プラハは、ウィーンより美しいよ。

あるウィーンっ子が、筆者に呟いた言葉です。ウィーンも十二分に美しいのになぜ、と思いましたが、プラハを訪れて納得しました。戦火で甚大な被害を受けたウィーンと違い、プラハには中世から20世紀に至る歴史がそのまま息づいているのです。この街もまた、苦難の歴史を重ねてきたにもかかわらず。

そんなプラハを彩ってきた多くの芸術家のなかでも、ベドルジハ・スメタナ(1824～1884)とアルフォンス・ミュシャ(チェコ語で「ムハ」、1860～1939)は別格です。二人とも、「チェコ」という国、プラハという街のために畢生の大作を残したからです。スメタナの《わが祖国》、ミュシャの『スラヴ叙事詩』がそれ。ともに、故国の伝説や歴史や風景、そして解放や民族の勝利を雄大なスケールで綴った感動的な作品です。しかし傑作誕生の背景には、作者たちの尋常ならざる苦闘がありました。彼らの母国が、外国に蹂躪された苦悩を味わってきたように。

スメタナは、長年チェコを支配していたハプスブルク帝国が衰えて、チェコの民族意識が高まった時期に活動し、チェコ音楽の振興に尽くした作曲家です。《売られた花嫁》など自国の伝説を題材にしたオペラで、ドイツ音楽一辺倒だったチェコ音楽界を刷新。建設中だった国民劇場の仮劇場監督にもなりました。

しかし災難は、絶頂期に訪れます。50歳を過ぎた頃から、梅毒に起因する失聴という不幸に見舞われたのです。音楽家にとって致命的な聴覚を失う恐怖のただなかで書き上げられた大作こそ、《わが祖国》でした。

ミュシャの苦闘は、スメタナと違い、時代に恵まれなかったことに始まります。モラヴィアの田舎町に生まれ、パリでアール・ヌーヴォーの寵児として一世を風靡したミュシャでしたが、想いはいつも祖国にありました。パリからアメリカに渡り、パトロン探しにつとめたのは、いつかチェコに戻って貢献したいという願いからでした。とりわけ1908年にボストンで、ボストン交響楽団による《わが祖国》の演奏に接したことは、ミュシャの意思を決定づけます。チェコの伝説や風景を雄大に描いた《わが祖国》から受けた感銘は、以前からあたためていた、祖国の歴史をテーマにした大作『スラヴ叙事詩』の構想を後押ししました。

帰国後の「ミュシャ」は、「ムハ」と呼ばれるべきでしょう。彼は積極的に国のために仕事をし、紙幣のデザインなど無償の仕事も進んで引き受けました。しかし、祖国はムハに冷淡でした。国民主義が燃えた時代は去り、アール・ヌーヴォーもまた流行遅れでした。そんななかで、ムハは大作『スラヴ叙事詩』に取り組みます。歴史画など古臭い、との囁きを背後に聞きながら……。

神話的な過去から「スラヴ人民の勝利」まで、1000年にわたるチェコ人の歴史を描く20枚の

連作『スラヴ叙事詩』は、18年をかけて完成され、チェコ国民とプラハ市に寄贈されました。しかしプラハ市もまた、この功績に冷淡でした。作品は田舎町の城にしまわれ、埃にまみれます。ムハは第二次大戦のさなかに投獄される憂き目にもあい、まもなく世を去りました。『スラヴ叙事詩』がプラハに戻ったのは、つい最近、2012年のことでした。

『スラヴ叙事詩』でのムハは、官能的な美女が微笑むポスター作者のミュシャとは別人です。この春日本で開催される「ミュシャ展」では、『スラヴ叙事詩』全20枚が展示されますが、国外でのお披露目はこれが初。奇跡のような機会です。「ミュシャ」ならぬ「ムハ」の真髄と向き合えることでしょ。

そして今宵は、ムハに靈感を与えた《わが祖国》を、他ならぬプラハのオーケストラで味わう一期一会の演奏会。どうぞ存分に、お楽しみくださいますよう。

### 《わが祖国》について

1874年から79年にかけて作曲された《わが祖国》は、チェコの歴史や伝説や風景を題材に、民族復興の願いを託した、6曲からなる交響詩。特定の対象をオーケストラで描写する「交響詩」というジャンルは、チェコではまだなじみがなかったため、スメタナは各曲に詳しいプログラム解説をつけている。全曲のなかでは、「モルダウ(チェコ語で「ヴルタヴァ」)」川の流れを描く第2曲の〈モルダウ〉が有名だが、作品にこめられた民族の復興という思想をダイレクトに表現しているのは、第5曲の〈ターボル〉と第6曲の〈ブラニーク〉だろう。この2曲は、チェコ史上きわめて重要な「フス派」をテーマにしている。「フス派」は、15世紀にヤン・フスが起こしたカトリック教会改革の動きで、「フス戦争」と呼ばれる一連の戦争へとつながり、最終的には敗退したものの、後にドイツでルターによって実現した宗教改革の先駆けとなった。チェコ人にとっては英雄的な出来事であり、ミュシャの『スラヴ叙事詩』でも、歴史の輝かしい1ページとして取り上げられている。

全体は、以下の6曲から構成される。

**第1曲 高い城(ヴィシエフラト)** モルダウ河畔に聳える岩山で、神々や古代の英雄を祀る、チェコ民族の聖地とされる場所の描写。冒頭で、吟遊詩人の竖琴を暗示するハーブが奏でるテーマは、全曲を貫く主題となる。

**第2曲 モルダウ(ヴルタヴァ)** 源流から大河への合流まで、空気感豊かな音楽で描かれる川の一生。

**第3曲 シャールカ** 男に復讐した処女シャールカの伝説を題材にした、劇的な曲。

**第4曲 ボヘミアの森と草原から** 豊かな自然とそこから得る豊かな感情を描く。

**第5曲 ターボル** 「ターボル」はフス派の本拠地の名。フス派の賛美歌がメインテーマとなり、輝かしい時代を回想する。

**第6曲 ブラニーク** 「ブラニーク」はフス戦争で敗れた戦士たちがひそんだ山。前曲と同じ賛美歌を軸に、戦闘と勝利、祝典的な行進が描かれる。